『遺食（いしょく）』

作／武田　宜裕　×　山川　愛美

【登場人物】

エイゴ　役所勤めの公務員。故・エイイチの息子。

春花　エイゴの妻。エイゴにとっては再婚。大学の事務員。

モモ　エイゴの連れ子、一人娘。公務員試験の勉強中。

アオキ　モモの恋人。花屋でバイト。

イトウ　遺食師。エイイチの大学の元ゼミ生。

◆エイイチ…故人、エイゴの父。元大学教授。

【あらすじ】

故人の遺志を次代に継承するという目的のもと「亡くなった人間の肉を相続して食べる＝遺食」が法制化された社会。制度の生みの親とも言える研究を続けていた文化人類学者のミスジ・エイイチが亡くなった。

葬儀の翌日、エイイチの息子・エイゴの自宅に「遺食師」のイトウが現れる。再婚の妻・春花と、前妻との間に生まれた一人娘のモモと共に、遺食相続の手続きと「遺食式」の段取りの説明を受けたエイゴは、法律上、遺食は「努力義務」であり食べないといけないわけではないと相続を拒む。そんなエイゴに対し春花は「貴方が食べないなら私が食べる」と言い放つ。

エイイチが務める大学に勤務する春花。そしてイトウはかつてエイイチのゼミの学生であり、春花とも接点があった。久しぶりの再会に二人の間にはどこかぎこちない空気が漂う。

翌日。モモは遺食制度の詳しい説明を聞くためイトウを呼び出す。制度上、相続の第一順位であるエイゴが拒否した場合、第二順位の孫である自身に相続権が与えられることに実感が湧かないモモ。春花はエイイチの研究室の書物を整理するため自宅に運び込む。帰宅したエイゴは、イトウの存在を訝しみ、春花がエイイチの書物を持ち帰ったことに嫌悪感を示す。エイゴが書物の入った箱を漁ると『死んだら何味になりたい』という、遺食制度ができる前に故人の肉の味を想像して書かれた詩集が現れる。その本の間に手紙のようなものが挟まれているのを発見するエイゴ。春花に宛てた恋文のような内容と、その手紙に狼狽えるイトウを見て、エイゴはイトウと春花の関係を疑い、春花を問い詰めるが、春花は多くを語らず、エイゴは猜疑心を増幅させてゆく。

一方、モモは、自身がエイイチの肉を食べる可能性を前に葛藤し、婚約者であるアオキに悩みを打ち明ける。アオキは「食べたいから食べる、俺はそうした」と、制度ができた直後に亡くなった父の肉を食べたと告げる。

エイゴは、イトウを呼び出し、再度春花との関係を問い詰めるが、イトウの口から語られたのは、学生時代に春花がイトウと同じエイイチのゼミの学生からストーカーに遭っていたこと、そしてその事件後から生まれた春花とエイイチの関わりであった。エイイチを師と仰ぐイトウから、何故父親の遺食を拒むのかを問われたエイゴは、遺食制度ができる前、エイイチが、亡くなった自身の妻、即ちエイゴの母親の遺体を食べたこと、それがエイイチに対する嫌悪の源泉であることを明かした。

モモは、エイゴと春花の間に生まれていく溝と、遺食を巡る自身の葛藤から試験勉強が手につかず、挙げ句エイゴに「本当に父親を食べないのか」と問う。エイゴに答えをはぐらかされたモモは、イトウが持ってきたエイイチの肉を「ゴミだから捨てた」とエイゴに告げる。激怒するエイゴだったが、ゴミじゃないなら食べろと詰め寄られ、家を飛び出す。そこにエイイチの肉の入った箱を抱えたイトウが現れる。肉を捨てたというのはモモの嘘だった。エイイチの肉を目の当たりにして「食べられない」と呟くモモ。イトウは、「努力したのなら義務ではない、選んでいい」とモモを諭す。再び祖父の肉と向き合ったモモは、エイゴを呼びに家を飛び出す。

一人エイイチの肉を見つめるイトウの元に春花が現れる。肉を持ってくるよう依頼したのは春花だった。イトウは春花に、ストーカーの犯人を警察に突き出さなかった理由を春花に問う。春花は、あの行為は途方もなく抱えきれない感情の膨張による成長痛のようなものだと解釈したと、ストーカーの犯人であったイトウに伝える。イトウは、生きている春花を食べたいと思った自分の異常さへの葛藤を告白し、春花に謝罪する。春花は、エイイチがいなくなった寂しさを吐露し、自分を食べてみるかとイトウに提案する。イトウに体を差し出す春花。だがイトウは食べず、春花のもとを去る。

帰宅したエイゴは春花に、大学でエイイチとどんな話を交わしていたのか尋ねる。春花はエイイチから聞かされていたエイゴへの想いを伝える。春花はエイイチがエイゴの母を食べたこともエイイチから聞いていた。大好きだったから食べたのだ、と。エイゴは、エイイチへの嫌悪は自身のつまらない嫉妬とコンプレックスによるものだと吐露する。

和解の空気が漂う二人の元にアオキが現れ、モモを迎えに行ってほしいとエイゴに伝える。アオキと共に家を飛び出すエイゴ。春花はテーブルの上に置かれた胡蝶蘭を見つめる。それは遺食式の際に飾るために、花屋で働くアオキが用意したものであったが、戻ってきたアオキから、それは手違いであり、ある者からこの日に届けるように依頼されたものだったと伝える。胡蝶蘭に添えられたメッセージカードを読んだ春花。胡蝶蘭はエイイチからの贈り物であった。春花は、抑えていたエイイチへの想いを吐露し、エイイチの肉に手を伸ばした。

【第一場】ある日

アオキの自宅。
モモが座っている。
モモはスマホでゲームをしているように見えて、アプリで勉強している。
奥からアオキの声。

アオキ　（声）あと5分ー

エプロン姿のアオキが入ってきた。
唐揚げの盛られたお皿を手に持っている。

アオキ　そろそろご飯炊けるよ
モモ　（スマホをいじっている）
アオキ　モモちゃん
モモ　あと何分
アオキ　5分
モモ　じゃ5分後に
アオキ　オッケー。順調？
モモ　ノー
アオキ　試験、来週だっけ
モモ　イエス。（スマホから目を離す）あーもう範囲広すぎだよ公務員試験。（スマホを見る）平均点ギリギリかー、ヤバ
アオキ　絶対受かるよモモちゃんは
モモ　この世に絶対はないのだよ
アオキ　頭良いもん、頭良い家系。俺バカの家系
モモ　何それ
アオキ　お父さん役所でおじいちゃん大学の教授は頭良い家系だよ。俺バカだから取柄ないし
モモ　（唐揚げを一個手づかみで口の中に）
アオキ　どう？
モモ　アオキくんが彼氏で良かった
アオキ　（笑顔）あと5皿あるから夜食に食べて
モモ　これ以上私を太らせてどうすんの。食べる気？
アオキ　えっ、食べていいの？
モモ　え、それどっちの意味？
アオキ　どっち？
モモ　何でもない。あ、今度さ、面接の練習付き合って
アオキ　面接
モモ　うん一次受かったらだけど。アオキくん今までバイトの面接死ぬほど受けてきてるから、コツとか知ってるかなって
アオキ　聞かれたことに素直に答えたらいいよ
モモ　え、私素直じゃないからな。役所の人って二枚舌が必要って聞くから
アオキ　お父さん、そうなの？
モモ　うーん嘘はヘタかな
アオキ　じゃあモモちゃんも素直、素直さの遺伝子

モモ　ご飯何分？

アオキ、奥へ。

アオキ　（声）あと3分――！

カラスの鳴き声がやや大きい。
モモ、外が気になり、窓に近づき外の様子を見る。
アオキ、戻ってきた。

モモ　捨てたのかな
アオキ　何？
モモ　生ゴミ。前の晩に捨てる人結構いるって言ってたじゃん
アオキ　あー。この前、朝ゴミ捨ていったら袋が食いちぎられてて、ゴミめっちゃ散らばってた
モモ　ルール守らない人いるよね。あ、ネットで見たんだけど。肉を捨てた人がいるんだって
アオキ　肉？
モモ　人の肉。遺食を受けたやつ。肉のＤＮＡから犯人特定したんだって
アオキ　いしょく？
モモ　うん、食べるほうの
アオキ　漢字どう書くの
モモ　遺書の遺に、食べる。臓器移植じゃないよ
アオキ　臓器移植。漢字どう書くの
モモ　……でね、捨てたのは高齢のお母さんの肉で、息子が犯人だって。捨てるなら相続しなきゃいいのにね
アオキ　モモちゃん、肉食べる？
モモ　うん？（唐揚げを見る）食べてる
アオキ　ううん、お父さん
モモ　え？
アオキ　もしお父さんが死んで、モモちゃんが食べるってなったら
モモ　待って待って、どしたの急に
アオキ　面接の練習
モモ　そんな質問絶対出ないよ！
アオキ　この世に絶対はないよ。あと聞かれたことには素直に答える
モモ　そこまで真面目に考えたことないもん。法律上は義務ってなってるけど
アオキ　じゃあ質問変える。俺が死んだら、俺の肉食べる？
モモ　あ、うーん……
アオキ　食べたくない？
モモ　そういうことじゃなくて、
アオキ　（鍛えた腕をアピール）ここ美味いよ。鍛えてるから
モモ　……
アオキ　でもお腹はゆるいからオススメしない
モモ　（スマホに目を落とす）適度に脂肪あるほうが霜降りで美味しいかも

アオキ　確かに。太ろ（唐揚げを食べる）
モモ　アオキくんはどうなの
アオキ　え？
モモ　私が死んだら食べる？
アオキ　（悲しそう）
モモ　ん？
アオキ　死んじゃ嫌！君のいない人生は想像したくない。ご飯食べて健康第一で長生きして（唐揚げの皿を差し出す）
モモ　はいはい、わかった。あ、ね、お父さんらに挨拶行く話なんだけど
アオキ　うん
モモ　春さん、実家に帰るみたいなんだ、だから週末無理かも
アオキ　なんかあったの？
モモ　え？いやいや、ずっと帰ってなかったからって。3泊4日だったかな、だから来週に仕切り直し
アオキ　そっか、わかった。スーツ買う
モモ　えいいよそこまで
アオキ　そういうわけにはいかないよ。お花も持ってくし、あとケーキも
モモ　お祝いじゃないからいいって。炊けた？

アオキ、急いで奥へ去った。

アオキ　（声）ジャスト0秒！

モモ、唐揚げの皿を見る。

モモ　健康第一（と、唐揚げを一個口に入れた）

カラスはずっと鳴いている。
モモのスマホに着信。
モモ、電話に出る。

モモ　はーい。うん？今からごはん。アオキくんと。今晩遅くなるから、お父さん先寝てていいよ。（笑う）何の心配してるの。で何？

アオキ、戻ってきた。

アオキ　ごめん。モモちゃんのお茶碗、欠けてた
モモ　え、ウソ
アオキ　ウソじゃない。買ったばかりなのに！（モモの様子を見て）モモちゃん？
モモ　おじいちゃん死んだ
アオキ　え？

カラスの鳴き声、大きくなる。

【第二場】葬儀

モモの祖父エイイチが亡くなり、葬儀が行われる。
喪服姿の春花が座っている。傍らに箱。骨箱のように見える。
離れて、喪服姿のエイゴ。その場で喪服を脱ぎ、去った。
春花、傍らの箱を開けると、中から葉だけの胡蝶蘭。
春花、箱を戻し、持って去った。

【第三場】葬儀の翌日、午前

エイゴの自宅のリビング。
中央にテーブル。テーブルの周りに椅子が3脚。
エイゴがリビングに入ってきた。
片手には缶ビール。もう片手に新聞紙。
エイゴ、椅子に座り、しばらく物思いに耽る。
モモがリビングに入ってきた。

モモ　あ
エイゴ　おお
モモ　起きたらいないから心配したよ
エイゴ　うん家出してた。ゴミ袋、カラスにやられてたけど、あれうちのか？
モモ　え、知らないけど、誰か肉捨てた？
エイゴ　肉？
モモ　や……春さんちゃんと朝捨ててるから違うでしょ
エイゴ　そう、ならいいけど
モモ　……ビール？
エイゴ　うん？ノンアル
モモ　ビールじゃん。朝から
エイゴ　休みだもん。朝ごはん食べる？
モモ　あーお腹空いてない。お父さん食べた？
エイゴ　お父さん朝は食べない
モモ　え、朝は絶対パン派じゃなかった？
エイゴ　この世に絶対はない
モモ　（エイゴをクンクン）タバコ吸ったでしょ
エイゴ　ん？（自分のニオイをチェック）いいや？
モモ　やめたと思ってたのに。厚生労働省の調べによれば男性の肺がんの約7割は　タバコが原因、そのうち肺がんによる死者の約半数が肉質に何らかの異常があり相続対象外となっている
エイゴ　？
モモ　ニコチンが残ってると食用として認められない可能性が高いって話
エイゴ　健康を心配したわけじゃないのか
モモ　どっちもですけど？お父さん、休みいつまで？
エイゴ　ん、今週いっぱい忌引き休暇
モモ　へー公務員ってそんなに休めるんだ
エイゴ　有休使い切らないけどな
モモ　うん、休んでるイメージなかった

エイゴ　あんときは保育所の建設でバタバタだったからな
モモ　駅前にできたやつ？あれお父さんが建てたの？
エイゴ　そうトンカチでこう（トンカチを殴る仕草）
モモ　……
エイゴ　あ、二次の面接な。市の計画関係全般押さえとけ。基本ホームページ載ってるから。あまり複雑なことは聞かないけど、総務部長、めんどくさいタイプだから気をつけろ
モモ　え？
エイゴ　ん？
モモ　いや聞いてもないのにアドバイス
エイゴ　聞きたそうな顔だったから
モモ　全然

春花、外から帰ってきて、リビングに入ってきた。
買い物袋を持っている。

春花　あ、起きた？買い物してたら遅くなっちゃった。モモちゃん、アオキ君の下着これでいい？
モモ　え、買ってきたの
春花　さすがにお父さんのじゃまずいでしょ、サイズ違いすぎるし
モモ　いいよ。払います
春花　じゃあ出世払いで（笑う）これ置いてくるね。あ、そろそろ来るから準備してね

春花、買い物袋を持って奥へ。

エイゴ　彼、まだいるの
モモ　あ、アオキくん？お父さんが無理やり飲ませたおかげで部屋で寝てます
エイゴ　お前の部屋で？
モモ　ほかに部屋ないじゃん。春さんが布団敷いてくれたの。私がバイト先に連絡して休みにしてもらったのバイト？
エイゴ　花屋の、って昨日話、してたじゃん。起こしてくる、お風呂場入ってこないでよ
モモ　え一緒に入るの？
エイゴ　お父さんは心配症

モモ、奥へ。
春花、戻ってきた。

春花　ねえ、遺食師さんに出すのお茶だけでいいかな。お茶菓子とか用意する？
エイゴ　お茶菓子って何？
春花　ケーキとか？今から買いに行こうか？
エイゴ　お茶にケーキは合わないよ
春花　え普通に合うよ
エイゴ　ていうかケーキ出す？家庭訪問みたいじゃん

春花　じゃ何出したらいい？
エイゴ　そもそも要らないよ
春花　わかった

やや沈黙。

春花　あー。緑茶切らしてたかも！さっき買えばよかった。ほうじ茶じゃ失礼かな
エイゴ　一緒だよ
春花　そっか。着替えないの？
エイゴ　いいよこのままで
春花　ダサ
エイゴ　うん？
春花　カッコいい
エイゴ　カッコいいでしょ。カッコいいんだよ
春花　アオキ君、いい子だよね。あの子好きだな私。エイゴより背高いね
エイゴ　俺、猫背だから互角
春花　お義父さんとどっちが高い？
エイゴ　え、誰が？
春花　アオキくん
エイゴ　……知らないけど

やや沈黙。

エイゴ　実家のほうはいいの？
春花　うん、飛行機キャンセルした。また日を改めて予約する
エイゴ　あやっぱ行くの
春花　ダメなの？
エイゴ　ダメって言った？
春花　じゃあオーケー？
エイゴ　あれから考えたんだけど
春花　うん？

モモ、戻ってくる。

モモ　起きた。タオル適当に出したよ
春花　あ、新しいタオルあるから待って
モモ　え、いいよそこまでしなくても
春花　シャンプーとコンディショナー、見た目分かりづらいから教えてあげて
モモ　大丈夫だって

玄関のチャイムの音。

春花　はーい
モモ　私行く。はーい

モモ、リビングを出て玄関へ。

春花　（エイゴに）テーブルの上片付けて。あ、私片付ける。椅子もう一脚いるよね

春花、ビールと新聞紙を持って奥へ。

モモ　（声）あどうもどうもお世話になります。どうぞ、あ、スリッパとかなくてごめんなさい

モモが部屋に入ってくる。あとからイトウが入ってくる。

モモ　お父さん、遺食師の人きたよ

イトウ　お邪魔いたします

エイゴ　あれ……あの、葬儀のときの、えっと体の大きいメガネの

イトウ　上田ですか。急な体調不良でして、本日は私が代理で参りました。（名刺を差し出す）イトウと申します。この度は大変ご愁傷様です

エイゴ　そうですか。昨日お元気そうでしたけど

イトウ　急な発熱でして、ご迷惑をおかけして申し訳ありません

春花、折りたたみ椅子を一脚持って戻ってきた。

春花、イトウに気づく。

イトウも振り返り、春花に気づいた。

モモ　どうぞ（座るよう促す）

イトウ　どうも（座る）

イトウが座った流れでモモ、座る。

やや沈黙。

モモ　えっと、お茶とか出すのかな？春さん

春花　あ、うん

イトウ　お構いなく。（水筒を出して）僕はこれで。アレルギー体質で飲めないんです、飲むと喉がイガイガしてしまって

モモ　（小声でエイゴに）お茶アレルギーとかあるんだね

イトウ　あるんです（と、書類やタブレットを取り出す）

モモ　（聞こえていたので焦る）大変ですねー

春花　貴方お茶は？

エイゴ　いい。始めてもらえますか

春花、テーブル付近に折り畳み椅子を置いて座る。

イトウ、カバンから書類とタブレットを取り出す。

イトウ　昨日、上田からご説明した内容と重複する部分があるかもしれませんがご容赦ください。亡くなられたミスジ・エイイチ様ですが、既往歴上、大きな病気はなく、脳卒中による突然死ということで、検体の結果、問題

のある部位はありませんでした。ですのでご指定の部位を当社で採取した後、ご遺体を火葬いたします。火葬までの間は当社でご遺体を保管いたします。ご主人、よろしいでしょうか

春花　……いい？

エイゴ　……続きお願いします

イトウ　次に遺食式についてですが、（タブレットを取り出し）こちらの映像をご覧ください

イトウ、タブレットの動画を再生する。

【タブレットの音声】

（ナレーション）「遺食式は、故人さまの肉を頂く際、故人に感謝し、故人さまとの思い出を噛みしめる上で重要な儀式です」

（家族の声）「いただきます」

モモ　**（子どもの声）「うん、美味しい」**

春花　**（大人の男性の声）「おじいちゃんの足、噛み応えがあるね」**

モモ　**（大人の女性の声）「若い頃、陸上の選手だったからかもね」**

イトウ　**（ナレ）「故人さまのどの部位を残し、頂くか、思い残しや食べ残しがないよう、ご家族でしっかりと話し合うことが大切です」**

モモ　**（家族の声）「ごちそうさまでした」**

春花　**イトウ、動画を停止する。**

イトウ　昨日、ミスジ・エイゴ様よりご指定いただきました遺食部位は、右手、両肩、そして両指になります。上田のほうからお控えをお渡ししているかと思いますが、改めてご確認ください。ご希望の遺食部位の変更、追加がございましたら、名刺の電話番号にご連絡いただき、事務所までご足労願います。なお手続きの際にはマイナンバーカードをご持参ください。ご変更等の受付は本日１６時まで、遺食されるエイイチ様のお身体をお持ちするのは、遺食部位決定日から２４時間以降となります。それより早い時間をご希望の場合、追加料金をお支払いいただくことで対応も可能ですが、現在火葬同様予約待ちとなっておりまして、大変申し訳ございませんがミスジ様との再会は２４時間以降でお願いしております

再会？

もう一度おじいちゃんに会うってこと

ああ……

続いて遺食の方法です。特段形式に決まりはございませんが、肉の調理に関しては、当社の専属シェフが責任を持って調理いたします。その際、こちらの和・洋・中の３種類、いずれかお好みのものをお選びいただく形になります。（パンフレットを見せる）ミスジ様からは洋食のこちらのコースで承っております

すご、結婚式の料理みたい……

調理する前の故人の肉に会うことはできるんですか

イトウ　できます。遺食会場は、ご自宅か、当方でご紹介いたしましたお店の中から選んでいただけます。お店の場合も、事前に故人と過ごしていただき、故人をお店にお持ちいただいてから調理に入ることもできます。ミスジ様からは、調理前の再会の御予約を承っておりませんでしたが、いかがなされますか

春花　（エイゴに）せっかくだし、会う？

エイゴ　いいよ、予約してないみたいだし

春花　でも変更できるみたいだから。（モモに）どうする？

モモ　え？あ、中華への変更もできますか？

春花　そっちじゃなくて

モモ　え？

エイゴ　全部変更なしでお願いします

やや沈黙。

イトウ　説明は以上です。ほかに何かご質問は

春花　私は大丈夫。何かある？

エイゴ　これ、式は必ずやるんですか？

イトウ　はい？

エイゴ　式をしない場合は、費用はかかりませんよね

イトウ　ええ。あの、しないと言うのは？

エイゴ　費用の話を聞いてるだけです

春花　お金のことはいいじゃない

エイゴ　どうして？大事なことだし、親父の肉をどうするかはこっちで決めればいい

春花　あ、自分たちで調理して食べるってこと？（イトウに）できるんですか？

イトウ　可能は可能ですが、人間の肉は調理が難しいので、当方にお任せいただくのが安心安全かと思います

エイゴ　そもそも食べないといけないんですか

間。

春花　どういう意味？

エイゴ　そのままの意味、親父を食べないといけない理由は？

春花　そりゃ、肉を継いで食べることは法律で決まってるじゃない

エイゴ　正確には努力義務、食べないといけない、じゃない。

モモ　（モモに）違い分かる？

エイゴ　あ、なるべく努力しましょうっていう

春花　そう、ちゃんと勉強してる。そして相続する権利は放棄することもできる

エイゴ　放棄？

イトウ　（イトウに）私、今児童福祉関係の部署なんですけど、先般の法改正で、相続放棄された肉は保育所の給食に使用されることになったんです。ご存じですよね

はい。ご遺族が相続されない場合、遺食用の肉は今を生きる子どもたちへ継承されます。ただし生前に一般向け遺食提供の拒否希望を出されていた場合はその限

りではありません
エイゴ　父はどうでしたか
イトウ　拒否の登録はございませんでした
エイゴ　つまりそれが父の意思なんだと思います
春花　ちょっと待ってよ。本気なの？

会話の途中にタオルを肩にかけたアオキが現れた。
葬儀の服。髪が濡れている。

アオキ　おはようございます

皆、アオキを見る。

アオキ　アオキです。お風呂いただきました。シャンプーとコンディショナー順番間違えました。お風呂掃除させていただきました

エイゴ、立ち上がった。

春花　エイゴ
エイゴ　コンビニ行ってくる

春花、エイゴを追ってリビングを出ていった。

アオキ　俺、まずかった？
モモ　や……着替え、置いといたんだけど？
アオキ　ありがとう。でも一度帰らなきゃいけないし。行くね

春花、戻ってきた。

アオキ　（春花に）あ、お邪魔しました。お花、また改めて持ってきます
春花　うんありがとう。急なお願いでごめんね
アオキ　いえ、失礼します

アオキ、リビングを出ていった。

モモ　私も出てくる、お見送り
春花　ああ、うん。いってらっしゃい
モモ　お父さん多分タバコ。さっきもニオイした
春花　えー？

モモ、リビングを出ていった。
春花、イトウを見る。

イトウ　あの……また、日を改めましょうか
春花　……
イトウ　珍しいことではないです。喪主様は、葬儀のときは大勢に囲まれて儀式を執り行う立場ですから冷静でいられても、遺食式ではそうならないことも多いので

春花　ああ、うん。式の段取りとかまた相談させてもらえたら
イトウ　わかりました。保管料はかかりますが、故人様の部位はしばらく保存できますので、ごゆっくりご検討ください

イトウ、書類をカバンに入れていく。

春花　イトウくん
イトウ　……
春花　よね？
イトウ　……はい。ショウケイ大学人文学科文化人類学専攻、ミスジゼミ所属
春花　やっぱり
イトウ　お久しぶりです
春花　や、似てるなと思ったけど自信なくて
イトウ　すみません
春花　え葬儀にいた？気づかなかったかも
イトウ　いえ。先生とは、卒業して就職してからはご縁がなくて。ミスジってあまりない苗字なので、まさかと思って
春花　そっか
イトウ　びっくりしました、今でも信じられません
春花　うん、急だった
イトウ　はい

やや沈黙。

イトウ　あの、春花さん
春花　……うん？
イトウ　や。ミスジさん……になられたんですね
春花　ああ。うん
イトウ　一瞬、先生の奥様になられたのかと
春花　ええ？ううん、ちがうちがう
イトウ　はい、でも仲良かったじゃないですか、春花さん、先生と
春花　そう？
イトウ　はい、先生が親しく話す学内の人って春花さんくらいでしたし
春花　え、そんなことないよ
イトウ　え、そうですよ
春花　え、そうなの？
イトウ　はい
春花　そっか……あ、イトウくんは？
イトウ　はい？
春花　結婚とか
イトウ　いえまだ
春花　そっか、うん
イトウ　あ、そうなるかもしれない人は……
春花　あーそうなんだ。よかったね

イトウ　……

やや沈黙。

イトウ　旦那様。似てませんね、先生に

春花　そう？そうかな

イトウ　あ、すみません、失礼なことを

春花　ううん、ううん

イトウ　……あ、じゃあ僕は

春花　うん

イトウ　……何か、先生のことでお手伝いできることがありますか

春花　お手伝い？

イトウ　はい。先生には本当にお世話になったので

春花　……

イトウ　名刺の番号、会社用なんで、個人のやつお伝えします。何かあれば、

春花　何で

イトウ　（春花を見る）

春花　うん、大丈夫

イトウ　……はい。失礼します（立ち上がる）

春花　**「死んだら何味になりたい」**

イトウ、春花を見た。

過去の瞬間が混じる。

春花　**「先生、この本借りるの？これ詩集だよ」**

イトウ　**「そうなんですか？すいません頼まれただけで中身知らなくて」**

春花　**「ふうん。こんなの研究に役立つのかな」**

イトウ　**「気分転換ですかね、ミスジ先生といえども息抜きは必要なのかも」**

春花　**「そうかもね。私も読んでみようかな」**

イトウ　**「じゃ僕も読みます」**

春花　**「じゃ、今度感想聞かせてね」**

イトウ　**「はい」**

イトウ、頭を下げる。

イトウ　すみません

イトウ、リビングを出ていった。

春花、一人たたずむ。

春花　あ、洗濯物

エイゴが戻ってくる。

缶ビールの入ったコンビニの袋を持っている。

春花　ああ、おかえり。イトウくんまた改めますって

エイゴ　そう。モモは？
春花　アオキくんお見送りするって一緒に出てった。タバコ心配してたよ
エイゴ　諦めろよいい加減。や、アイツ親父のタバコやめさせた実績あるから
春花　じゃあモモのおかげだね。遺食に問題ない、ちゃんと食べられるって、遺食師さん言ってたでしょう
エイゴ　ああ。知り合いなの。あの遺食師さん
春花　何で？
エイゴ　イトウくんって
春花　え、私言った？
エイゴ　うん言ったよ
春花　イトウさん、イトウさん（くん、ぽく）イトウくん（さん、ぽく）イトウくん
エイゴ　大学の関係？
春花　うんお義父さんのゼミ生。図書館に配属されてた頃によく話したの
エイゴ　そっか。なんでさっき言わなかったの
春花　久しぶりすぎて本人って自信なかったのよ。さっき確認したら、やっぱそうだった

少し沈黙。

春花　さっきどうしたの？話の途中なのに出てったりして
エイゴ　説明は全部聞いたと思うけど？
春花　違うよ
エイゴ　ああ洋食じゃないほうがよかった？変えたいなら連絡したら
春花　嫌なの？
エイゴ　何が？
春花　お義父さんを食べるの
エイゴ　……いや、モモが役所受けるなら色々知っといたほうがいいかなと思って。遺食の担当部署になったら色々面倒だから、国の制度だけど対応するのは役所だし苦情も全部受けることになる、マイナンバーと一緒だよ
春花　……
エイゴ　ね、ビール、まだあったっけ、冷蔵庫
春花　エイゴ。私、エイゴとちゃんと話がしたい
エイゴ　さっきからしてるじゃん
春花　大事な話だから
エイゴ　大事な話ならほかにもあるんじゃない？
春花　離婚の話？
エイゴ　そうとは言ってないけど
春花　ね、お義父さん亡くなったのよ。エイゴのお父さんだよ。ちゃんと式をやってお義父さんのこと、
エイゴ　だから要らないって

エイゴ、缶ビールの袋を持って奥へ。

春花　要らない

エイゴ、戻ってきた。

エイゴ　何で食べないといけないの？息子だから努力する義務がある？なら放棄する権利は俺にはないってこと？公務員だから俺の意思がどうじゃなしに国が決めたことには従えってこと？

モモ、エイゴの話の途中に戻ってきていたが、リビングの外で話を聞いていた。

モモ　（リビングに入ってきて）何の話

エイゴ　……マイナンバーカード作れって話

モモ　ごめん私作ってない

エイゴ　作らなくていい

春花　私が食べる

エイゴ　（春花を見る）

春花　エイゴが食べないなら、私がミスジエイイチを食べます

モモ、携帯を取り出して試験勉強を始める。

モモ　「私は食べない。嫌だから食べない。」小さい頃そうやって本当のお母さんのご飯を食べなかったことは何度もある。お母さんが選んでくれた洋服が気に入らなくて、要らない着ないって言ったことも、覚えてないけどきっとある。お母さんからジュースを買うお小遣いをもらってお母さんのお皿から私の大好きなトウモロコシをバターで炒めたやつだけもらって散々好きなものだけをもらって、最後に、お母さんは食べない、要らないって、私なら言うだろうか

【第四場】その2日後の午後

モモ、テーブルで勉強している。

玄関でアオキの声。

アオキ　（声）アオキです。ごめんください

モモ、返事をせずに勉強している。

アオキ　（声）アオキです。ごめんください

モモ、返事をせずに勉強している。

アオキ　（声）お邪魔します

アオキ、胡蝶蘭の鉢植えを持ってリビングに入ってくる。

アオキ　いたの
モモ　（アオキに気づき驚く）何故いる？
アオキ　うん？
モモ　アナタ
アオキ　いるから。え、いない？
モモ　いるいる
アオキ　玄関鍵かかってなかった。不用心だよ。俺じゃなかったら危ないよ
モモ　でも入ってくるかな普通

玄関のチャイムが鳴る。

アオキ　はーい（玄関に行こうとする）
モモ　（アオキを止める）私が出る。（玄関に向かって）はーい

モモ、リビングを出ていった。

モモ　（声）あーどうもどうも。すみませんお忙しいのに。どうぞ。スリッパないですけど

アオキの携帯に着信。

アオキ　はいアオキです。あ今配達中です。（電話しながら座る）あーそれギャラリーに置く専用のやつですね。今回はテーブルにもアレンジメントが欲しいって追加で作ったやつです

アオキの電話中に、モモとイトウが入ってくる。
モモ、イトウに座るよう無言で促し、お茶を淹れるために台所へ。
イトウ、空いている席に座る。

アオキ　あー、配達忘れだと思いますよ。近いし店オープンが19時なんで今から連絡したら間に合うと思います。僕もう少しかかりますんで。じゃあ

アオキとイトウ、目が合う。気まずい空気。
イトウ、会釈する。

イトウ　イトウです。先日の遺食ご説明の
アオキ　あ。あー、あのときの
イトウ　どうも。（鉢植えを指して）それは遺食式用ですか？
アオキ　そうです。何か？
イトウ　いえ、青い胡蝶蘭は珍しいなと思って
アオキ　ああ、ブルーエレガンスです。白い胡蝶蘭を青く染めたやつ
イトウ　そうですか
アオキ　（イトウをジッと見る）

イトウ　何か？
アオキ　やっぱ玄関にしよう

アオキ、鉢植えを持って玄関へ。
イトウ、水筒を取り出す。
モモ、お茶を淹れて持ってくる。

モモ　粗茶でーす
イトウ　……
モモ　……あ（水筒を見た）でしたねー、でしたでした。あれ（アオキがいない、キョロキョロ）
イトウ　何か
モモ　あ、いえいえ（お茶をテーブルに置く）わざわざすいません。お電話でもよかったんですけど
イトウ　いえ。（カバンから書類を取り出す）こちらが遺食相続者の変更届です。役所のホームページからもダウンロードできますが、今回は弊社で遺食関係の手続きを代行させていただいていますのでご説明も兼ねて。こちらに、お父様のご署名とご印鑑をいただきます。戸籍謄本や印鑑証明書などの必要書類は通常の相続手続きと同様ですが、念のためご確認ください。あと必ずマイナンバーカードをご持参ください
モモ　ありがとうございます
イトウ　お父様は、本当に相続されないんですか？
モモ　ああ。や、まだ。なのでこのことは内緒に。でもあの、？
イトウ　やっぱり、私なんですよね？父がもしもの時は
モモ　はい、お父様が相続放棄をせず、かつ第一相続人のお父様が相続しない場合は、第二相続人に当たるモモ様に権利が移行します
イトウ　はい、一応勉強はしてるんで仕組みは。なるほどねー
モモ　……（書類を見つめる）
イトウ　今日、お父様とお母様は？
モモ　ああ、父は、おじいちゃんの関係でいろいろ。母は大学のほうに
イトウ　お母様、お仕事、お忙しいんですか
モモ　なのかな？大学の仕事のことよく知らなくて。庶務課？ってデスクワーク系ですよね
イトウ　図書館ではないんですか？
モモ　昔、そうだった時もあったみたいです
イトウ　そうですか……
モモ　あイトウさん
イトウ　はい
モモ　遺食師の試験って難しかったですか
イトウ　受験されるんですか？
モモ　あ、いえいえ、私は公務員試験なんです。アプリで勉強やってるんですけど、終わりがなくって……遺食師って割と新しい資格じゃないですか。ユーチューブとかでは見たことはあるんですけど、そういうのに出てくる人割といかがわしい系ばっかで、ああイトウさん

イトウ　は違いますよ。実物会うの初めてなんで
モモ　実物
イトウ　言い方ヘンですよね
モモ　どうですか？
イトウ　はい？
モモ　実物
イトウ　……
モモ　……

モモ、イトウの目に圧を感じたか、そらすようにお茶を飲む。
アオキ、リビングに入ってきた。

アオキ　モモちゃん
モモ　ひょっ、アツッ！
イトウ　大丈夫ですか？（手を出す）
モモ　ひゃっ！
イトウ　？
モモ　あすいません、意外と熱くなくて逆にびっくり
アオキ　モモちゃん。お花玄関に置いといた
モモ　あ、うん
アオキ　あとトイレ借りた。トイレットペーパー切れてたから補充しておいた。掃除もしておいたよ
モモ　ありがと
アオキ　あ、今日、残業になりそう
モモ　おお、がんば
アオキ　うん。お父さんは？
モモ　わかんない、おじいちゃんの関係でいろいろ回ってるのかも
アオキ　お母さんは？
モモ　春さん？まだ帰ってないけど

アオキ、イトウを見る。

アオキ　じゃ、ふたり？
モモ　うん。あ、大丈夫だから、行ってらっしゃい
アオキ　うん

アオキ、座り、イトウに眼光を飛ばす。

モモ　うん？

アオキ、イトウに腕相撲を求める。
イトウ、ためらいつつ、腕を差し出す。
モモの合図で、腕相撲開始。
アオキ、必死で押すがイトウの腕は全然動かない。
イトウ、お情けのようにわざと負ける。
アオキ、歓喜。

アオキ　行くね
モモ　うん、ありがとう

アオキ、リビングを出ていった。
モモ、アオキを見送りに玄関へ。

モモ　（声）行ってらっしゃい

イトウ、座り心地が悪かったのか、前に座った席に移動。
モモ、戻ってきた。

モモ　……あ、で続きなんですけど、遺食の話
イトウ　ご興味がおありなんですか？
モモ　や、自分が食べるかもって考えたら、うん、色々知っておかないといけないかなって。将来、もし父が亡くなったら、ってのも考えたりしちゃって。あ、ちなみに父は再婚なんで、私一応、母が2人いることになるんですけど
イトウ　ああ
モモ　一緒に暮らしてないほうの母がもし亡くなったら、食べるの私ですよね？
イトウ　はい、その場合第一順位はモモ様になります
モモ　なるほど。や実際そうなっても困っちゃうんですけどね、今連絡もつかないし。で、春さんが亡くなった場合は？
イトウ　エイゴ様が第一順位、拒否すればモモ様が第一順位になります
モモ　そか、うん
イトウ　ずっと春さんって呼ばれてるんですか
モモ　あ、はい。初めて会ったのが高1で、春さんも「ムリにお母さんとか呼ばなくていいよ」って言ってくれてそうですか
イトウ　あの、皆さん、どの辺を食べるんですか？
モモ　ああ部位ですか？消化できない毛髪以外は割と満遍なく食べられてますね。よく牛肉に例えられます
イトウ　牛肉
モモ　はい。牛は一部を除いてほぼすべての部位が食べられます。人体も下処理は必要ですが、無駄な部分がほとんどない点では似ているかもしれません
イトウ　なるほど。でも人を牛肉に例えるのはなんかアレですね
モモ　食べる際の抵抗感が和らぎ、しっかり故人様を味わえるのであればそれでもよいと思います。目の前に美味しそうな肉がある。しっかりと焼かれ香ばしい香りが思い出とともに鼻腔をくすぐる、その思い出をそっと切り取るようにナイフとフォークで一口大に切って口の中に、故人様との日々を噛みしめるように噛んで、噛んで、噛んで……

イトウとモモの距離が近い。
春花が箱を一つ抱えてリビングに入ってきた。
春花、モモとイトウを見て、思わず箱を床に落とした。

モモ　大丈夫？
春花　あ、うん
モモ　イトウさんに遺食のこと色々教わってた
春花　そうなの。お忙しいのにわざわざ
イトウ　とんでもないです

春花、箱をテーブルに置く。

春花　よいしょ。（モモに）お父さんは？
モモ　うん、まだ帰ってない（箱を見てこれ何？
春花　おじいちゃんの研究室の本。早めに整理しとこうかなと思って持ってきた。玄関に3つと、あと車にも。全部運んだらさすがに腰に来た……

イトウ、会話している春花とモモを尻目にリビングを出ていく。

モモ　えー言ってくれたら、アオキくんに手伝わせたのに
春花　それは悪いわよ
モモ　いいのいいの、たまには花より重い物運ばせないと。私、運ぼうか
春花　モモちゃんは試験勉強に集中
モモ　や気分転換に

イトウ、箱を1つ抱えて戻ってきた。
春花とモモ、イトウに気づく。

イトウ　この辺でよかったですか？
春花　や、遺食師さんにそんなこと
イトウ　いいんです。先生の本ですから。ここに全部お持ちしたらいいんですよね？

イトウ、言いながら、リビングを出た。

モモ　ね、春さん
春花　うん？あ、大丈夫だった？
モモ　え何が？
春花　や何がってわけじゃないんだけど。何？
モモ　イトウさん。おじいちゃんの教え子さん？さっき「先生」って言ったから
春花　ああ、うん大学でね、おじいちゃんのゼミの学生さんだったの
モモ　そうだったんだね
春花　ね、玄関のお花、アオキくんが持ってきてくれたの？
モモ　うん。遺食式用だって。私青い胡蝶蘭初めて見た
春花　本当はもっと鮮やかな色のがあるんだけど、取り寄せに時間かかるみたいなの。おじいちゃんの研究室にもあったのよ。今日行ったら葉っぱだけになってたけどね

モモ　へえ、お花とか飾る人なんだ（箱の中を漁る）
春花　受験に役立ちそうなのある？ないか
モモ　うん専門的なのばっか（適当に一冊手に取る）おおこれ英文だ
春花　おじいちゃん語学力も堪能だったの。自分の足で世界を回って現地の人に話を聞いたり。夏休みなんかまず日本にいなかったでしょ
モモ　そういやお盆におじいちゃん、家にいなかったね

話の途中に、イトウ、箱を2つ抱えて戻ってきた。
先ほど箱を置いた付近に置く。

春花　うん。無理しないで、後で持ってくるから
イトウ　いえ。車に積んであるのも持ってきますね
モモ　イトウさん、おじいちゃんの教え子さんだったんですね
イトウ　ああ、はい先生には大変お世話に
モモ　なんか勉強できそうな雰囲気ですもん。一番弟子って感じ？
イトウ　や、一番じゃないですよ（春花を見た）
春花　ゼミで一番優秀だって先生言ってたよ
イトウ　ホントですか
春花　うん、ほかのゼミ生のまとめ役だったって
モモ　あ、春さんも知り合いなの？
春花　ああ、うん、図書館に配属だった頃にね、よく来てたの。おじいちゃんが借りた本を、代わりに返しに来たりね
モモ　え、パシリじゃん（イトウに）あ失礼
イトウ　いえ、実際そうなんです。いつも返却期限が過ぎた本を返すのが僕の役割でした
モモ　えー（春花に）迷惑な客だねおじいちゃん
春花　そうね
イトウ　あ……（モモが持っている本を手に取る）
春花　うん？
イトウ　これたぶん僕が貼った付箋です
春花　えーそうなの？
イトウ　はい、先生の研究室からお借りした本、つい付箋貼ったままで返しちゃうことが多くて
モモ　（イトウが開いている本をのぞき込む）これ、人ですか？
イトウ　ああ。人肉を食べる風習を持つ民族に関する研究書です。日本でも似たような風習が沖縄や九州、一部の地方にはあるんです（別のページを開く）
モモ　「骨噛み」
イトウ　亡くなった人への敬意と哀悼を込めて骨を噛む行為です。大切な人を自分の中に入れる行為は、一般常識や社会規範では解釈できない、そう先生は言っていました
モモ　あーだから。イトウさんが遺食師になったのはそれで
イトウ　や、まあ

モモのスマホに着信。電話に出る。

モモ　どしたの？え、残業は？……いいのにもう……わかった行く行く。（春花に）私アオキくんと晩ご飯約束してるの、行ってきます

春花　あ、うん。着替えていかないの？

モモ　着替えます（春花を手招き）

モモと春花、リビングの外で会話。

モモ　私、家に居なくていい？

春花　え、どうして？

モモ　や、昨日

春花　ああ。気にしすぎ、ちゃんと話しておくから

モモ　うん

モモは奥へ。春花、リビングに戻る。
イトウは座って先ほどの本を読んでいる。

春花　それ、持っていく？

イトウ　え、いいんですか

春花　結局専門書だから、ほとんど図書館に寄贈するつもりなの、だからいいよ

玄関でエイゴの声。

エイゴ　（声）おーい、この箱何？

春花　（玄関に聞こえるように）おかえりー、それお義父さんの本

エイゴ　（声）親父の？

春花、リビングを出て玄関へ。
イトウ、別の本を手に取る。
タイトルに一瞬目が奪われ、中を開く。
すると、折り畳まれた薄い白い紙が出てきた。
イトウ、開いて中を読む。

春花　（声）おつかれさま、手続き関係済んだ？

エイゴ　（声）一日じゃ終わらないから。誰か来てるの？

春花　（声）うん遺食師さん

イトウ、折り畳まれた紙を本の間に戻す。
エイゴ、リビングに入ってきた。

イトウ　お邪魔しています

エイゴ　どうも。約束してましたっけ

イトウ　あ、その後の状況をお伺いできればと思いまして

エイゴ　状況（と、テーブルの上の箱を見る）

イトウ　はい、遺食式の段取りもありますから

春花、箱を1つ持って戻ってきた。

イトウ　手伝います
春花　ううん。お話、してて

春花、出ていく。

エイゴ　親父の教え子さんだそうですね。生前父がお世話に
イトウ　いえ、私のほうこそ先生には
エイゴ　最初に言ってくれればいいのに。どうも失礼しました。
　　あ、妻とも顔見知りだそうで
イトウ　あ、ええ。ご説明が遅くなりまして
エイゴ　久しぶりすぎて気付かなかったんでしょ。まあ大学で
　　のことは僕もあまり聞　かないので。そもそも親父の
　　専門？文化人類学とか、よくわからないんですけどね。
　　親父がどんな研究してたのかはなんとなく。親戚から
　　聞かされていたので
イトウ　そうですか
エイゴ　ええ、変人だって言われてきました
イトウ　変人
エイゴ　まあ法律ができてちょっと救われたっていうか。あ、
　　遺食式の話でしたね。私、相続するって言いましたっ
　　け？
イトウ　あ、いえ、するものだと思っていましたので
エイゴ　式をやらないとお金にならないですしね
イトウ　いえ、そういうわけでは
エイゴ　いいんです。葬式も何も、全て経済の論理でできてる
　　のはわかってますよ、商売になって初めて文化として
　　成立するんです
イトウ　……
エイゴ　あの、あえて聞いてみるんですけど
イトウ　はい
エイゴ　イトウさんは遺食賛成派ですか？
イトウ　え？ああ、私はそれは、
エイゴ　まあ遺食師だから、ってのは抜きに、いざ肉が目の前
　　にあったら食べます？あ、この際、法律とか置いとい
　　て
イトウ　食べるか食べないかってことですか
エイゴ　ま、誰の肉かにもよるんでしょうけどね
イトウ　食べることは、生きること
エイゴ　？
イトウ　それがミスジ先生の口癖でした
エイゴ　ああ、え、だから？ま、親父の話はいいんですけど

春花、箱を1つ持って戻ってくる。
重いのか、床に置いた。
イトウ、春花に気づいて近づき、箱を自分が持ち、運んで床に置いた。

イトウ　車にあるの、全部持ってきますね
春花　うん、ありがとう

イトウ、リビングを出て玄関へ。

エイゴ　親父の本
春花　あ、うん、大学に出たついでにね、エイゴは興味ないと思うけど
エイゴ　なんでうちに持ってくるの
春花　なんでって。ずっと研究室に置いとけないし、私も見たかったし
エイゴ　親父の家でやってくれない？カビ臭いし、家の中ホコリっぽくなるから
春花　……うん、わかった。お義父さんの家持ってく
エイゴ　あと玄関の花、何？
春花　ああ遺食式用。綺麗でしょ？アオキくんに頼んで用意してもらったの。遺食式までに少しずつ増やしていくものらしいよ。ほかにもいろんなお花があるから、アオキくんに聞いてみようか？
エイゴ　いいよ。食べないって言ったじゃん
春花　ね、それもう一度ちゃんと話そうよ
エイゴ　ちゃんと？
春花　うん、ちゃんと
エイゴ　親父食べたい？
春花　……
エイゴ　や、配偶者にも請求する権利はあるみたいだよ。2分の1だったかな。俺が放棄しなければだけど
春花　くれるの？
エイゴ　欲しいの？

春花、隅に置いてある箱を数箱持ち上げ、リビングを出た。
玄関付近でイトウに会う。

春花　（声）ごめん、運んだやつ戻すの手伝ってもらえる？
イトウ　（声）え、はい

エイゴ、テーブルの上の箱を眺める。
一冊、本を適当に手に取り、何気なくパラパラとめくる。
そこに、さきほどの白い紙を見つけ、中を読む。
イトウ、戻ってきた。
エイゴ、白い紙をポケットに隠した。

エイゴ　全部親父の本ですか
イトウ　はい
エイゴ　こういう研究書の類いは全く読まないので、僕には価値がわからないんですが
イトウ　どれも絶版のものばかりなのですごく貴重です
エイゴ　『死んだら何味になりたい』。この本は僕でも聞いたことあります（と、本『死んだら何味になりたい』を渡す）

イトウ　（受け取る）法律が施行される前に出された詩集です。もし食べたらどんな味がするんだろうとか、色々な想像を詩に綴ったものです。当時は話題になりませんでしたが、最近ベストセラーに……（と、紙がないことに気づく）

エイゴ　そもそも味、するんですかね。どうしました？

イトウ　はい？

エイゴ　いや何か探してるようだから。何です？

イトウ　いや、何でもないです

エイゴ　（紙を見せる）これですか？

イトウ　……

エイゴ　「春花さん。考えてはいけないと思うほど、貴方のことを考えてしまいます」……これラブレターですかね

イトウ、咄嗟に紙を奪った。

エイゴ　どうしました？その紙なんです？

イトウ　言えません

エイゴ　言えないって、何かは知ってるんですか

モモ、着替えてリビングに現れた。

モモ　あ、帰ってる。アオキくんとご飯行ってくるね

エイゴ　ああ

モモ、エイゴの体をクンクン。タバコを疑う様子。

モモ　（イトウに）さっきはありがとうございました（エイゴに）イトウさん、おじいちゃんの一番弟子。ちゃんともてなして

モモ、リビングを出て玄関へ。

イトウ　あの、一番ではないです

エイゴ　実は先ほど上田さんに偶然お会いしました。恰幅が良い方でメガネも特徴的なデザインだったので割と覚えてて。急な体調不良でお仕事休まれてるって聞いてたからあれ、ってなって

イトウ　……

エイゴ　本当に偶然再会したんですか、春花と

玄関で春花とモモの声。

春花　（声）気を付けてね

モモ　（声）はーい

春花、戻ってきた。

春花　（エイゴに）モモ出かけたよ、アオキくんと晩御飯だって

エイゴ、イトウから白い紙を奪い、春花に見せる。

エイゴ　君これ何か知ってる？

春花、紙を手に取る。

春花　（エイゴに）これ、どこにあったの

エイゴ　親父の本の中だけど

春花　本当に？どれ？

エイゴ　どれでもいいだろ。え、その紙何なの？

春花　……

エイゴ　え、何で黙るの？（イトウを見る）彼、これが何なのか言えないんだって。説明できる？

春花　ただの手紙よ。うんと昔の

エイゴ　ただの。誰から誰への（と、イトウと春花を交互に見る）

春花　生徒のいたずらじゃない？もう忘れたけど

エイゴ　え、ごめん、全然わかんないんだけど、いたずら？

イトウ　あの、春花さんは、違うんです

エイゴ　違う？

イトウ　春花さんは、春花さんとはそういうんじゃないんです

エイゴ　俺何も言ってないんだけど、そういうんじゃないって何？ていうかお前さっきから春花さんって何だよ

イトウ　春花さんは、学生の時からそう呼んでます。僕だけじゃなく、親しみを込めてみんな呼んでました

エイゴ　じゃあその中でも特別の親しみを込めて呼んでたのが君ってこと？

イトウ　いえ、僕は、

春花　エイゴ。誤解だから

エイゴ　誤解。誤解ってつまり誤って解釈した側が悪いって意味だよな

春花　悪いなんて言ってない。ね、これどの本に挟んであったの？

エイゴ　……

春花　お義父さんのどの本に？エイゴ教えて

イトウ　（本を手に取り）この本です、春花さん、

エイゴ、本を奪う。

エイゴ　（イトウに）お引き取りください

イトウ、一礼をして去った。

春花、見送ろうとする。

エイゴ、イトウから奪った本をテーブルにバンと置く。

エイゴ　親父の本が何。そんなに大事なら親父の家でもどこでも行けよ！

エイゴ、奥に行こうとして、踵を返す。

エイゴ　って俺がひどいじゃんこれ。いいよ君の希望聞くから。俺、君の望むようにしてきたつもりだし。君がしたいってことは受け入れたし、したくないってことは無理にさせなかったし。まあタバコはこっそり吸ったけど……子どものことだってさ、君が望んでると思ってたけどそうじゃなかったから、じゃあ作らなくていいよって

春花、テーブルの上で散らばっている本を箱に入れていく。

春花　この部屋、ホコリっぽいね。片付けとくから、散歩行ってきていいよ

エイゴ　春花

春花　タバコ、吸っておいで

エイゴ、逡巡しつつリビングを出ていった。

春花　（エイゴがテーブルに置いた本を手に取り）わざわざ自分で買ったんだ

春花、白い紙を折り畳み、本に挟んだ。
そのまま座り、そっと本に顔をうずめる。
モモとアオキ、歩いてくる。
リビングとは別の場所。

モモ、不意に立ち止まった。

アオキ　どしたの？

モモ　帰る

アオキ　帰る？

モモ　うん、なんかお父さん心配なんだ

アオキ　じゃあ送る

モモ　うん

アオキ、行こうとするが、モモ、動かない。
アオキ、モモが動かないのに気づき、戻る。

アオキ　モモちゃん？

モモ　私、おじいちゃんを食べるかも。お父さん食べないかもだから

アオキ　なんで？

モモ　わかんない、食べたくないみたい

アオキ　そうなんだ。モモちゃんは？

モモ　え？

アオキ　食べたい？食べたくない？

モモ、スマホを取り出し操作。それをアオキに渡す。

モモ　これ遺食の意義を答える試験問題。「故人の遺志と尊厳を、家族等の特定の人が次世代に継承することを目

的とする」これが法律の建前。わかる？

アオキ、画面に現れたボタンを押すが、不正解のブーが鳴る。
以後、問題を解こうとボタンを押してはブーが鳴る。

モモ　亡くなった人の肉は栄養にならないの。むしろ肉の状態によっては有害にもなる、食べるためには然るべき下処理を施した上で必要量だけを食べる。つまりね、人の肉を食べるのは栄養のためじゃなく、火葬や納骨みたいなことに近い。亡くなった人への敬（うやま）いの儀式のようなものではないか。……わかる？

不正解のブー。アオキ、笑顔で首を横に振った。

モモ　だよね
アオキ　でもモモちゃんがすごく勉強したのはわかるよ

アオキ、適当にボタンを押すと正解のピンポン。

モモ　でも実際ね、自分が食べるかもって思ったら、あれ？ってなったの。法律の条文は頭にあるけど、食べるってなると、なんか違う、食べるって選ぶことじゃん？でお父さんは食べないことを選んだわけじゃん？ならしょうがないじゃん？って思うんだけど、なんか、うーん

アオキ　モモちゃんは食べたくないの？
モモ　……そうじゃないんだけど
アオキ　食べたい？
モモ　そう言われるとそれも……や、おじいちゃん、好きだよ？でも大人になってからあまり会ってなかったし、なんか遠いっていうか。あー私ひどいね
アオキ　ひどくない。モモちゃんは素敵
モモ　ありがと。でも春さんは、おじいちゃんを食べたいって言ってた。血がつながってなくても思うのに
アオキ　関係ないよ。食べたいから食べるの。俺はそうしたよ
モモ　そうした？
アオキ　俺の父さんのとき
モモ　……アオキくんの？法律ができる前じゃなかったの？
アオキ　できてすぐ、事故で死んだから
モモ　ごめん
アオキ　謝ることは何もないよ
モモ　うん
アオキ　行こ

アオキとモモ、歩き出す。
どこかから、カラスの鳴き声が聞こえている。
春花、体を起こした。

モモ　（立ち止まる）……聞いてもいい？お父さん食べたときのこと

アオキ、モモの手を取った。
モモとアオキの姿、消える。
春花、本を開く。

春花　苦味の残る二の腕、ふわりとお酒を染み込ませて、痺れるくらい辛い、あの日を思い出すような、噛んでも噛んでも飲み込めない後味を

イトウが現れ、座った。
春花、箱に本を入れ、立ち上がると、隅に残っている箱を抱えてリビングを出た。

【第五場】その夜

リビング。
イトウが座っている。
テーブルの上に置かれた箱を見つめている。
不意に立ち上がり、箱の中の本を見ようと立ち上がる。
ペットボトルのお茶を持ってエイゴが現れた。
エイゴ、お茶をテーブルに置く。

エイゴ　嘘です、自分用です
イトウ　……
エイゴ　あ、僕ね、昔牛乳アレルギーだったんです。鼻がつまって、涙が止まらなくなって、ノドがイガイガ。母が自然放牧で育った牛の牛乳をわざわざ取り寄せてくれて、それで治りました
イトウ　素敵なお母様です
エイゴ　……人の肉って、アレルギー出ないんですか
イトウ　出る方もいらっしゃいます。遺食の際には必ずアレルギー症状の聴き取りをおこないます
エイゴ　人間は共食いする生き物じゃないですしね、出ないほうがおかしい
イトウ　世界には戦争の際に人肉食がおこなわれた歴史があります。日本でも、第二次大戦中に日本兵がアメリカ人捕虜を殺して食べたという証言もあります。もっとも当時は食糧不足という背景があってのものですが
エイゴ　それ父に教わったんですか？
イトウ　僕が教わったのは、真理と本質です
エイゴ　あの本題ですけど
イトウ　……
エイゴ　このところ春花の様子がおかしいのは気づいてました。帰りがやたら遅い、仕事熱心なのは知ってる、けど君と会ってたなら全部の合点がいく。春花と会ってたんですか？
イトウ　春花さんとは大学以来会っていません。遺食師としてミスジ先生の式を担当することになり、ご自宅にお伺いして偶然

エイゴ　偶然、すごいですね。体調不良で担当が変わったと嘘をついてうちにやってきて……春花と会ってたんでしょ？

イトウ　いえ

エイゴ　じゃ何で嘘を？

イトウ　ミスジ先生の名前を見つけて思わずやりました。申し訳ありません

エイゴ　……わかりました。悪いのは親父だ

イトウ　……

エイゴ　え、そうでしょう？親父が死んで君がうちにやってきてこんなことになってしたくもない話をしてる。全部親父のせいです、死んでから迷惑かける親をどう思います

イトウ　先生は、素晴らしい方です

エイゴ　こんな状況を作り出したのに？

イトウ　それは先生のせいではありません

エイゴ　じゃ誰のせいですか

イトウ　僕のせいです

エイゴ　そういうのを偽善って言うんですよ遺食師さん

イトウ　すみません

エイゴ　僕もさ、許すかどうかはわかんないけど、まあ若気の至りだよな、とか、若気って歳じゃないか、ある種魔が差した的な、ってことで水に流してもいいかな、とか考えたりしてるんですよ

イトウ　水に

エイゴ　そう水に

イトウ　水飲んでもいいですか

イトウ、バッグから水筒を取り出す。

エイゴ、ペットボトルのお茶をイトウの前にドンと置く。

エイゴ　トイレ

エイゴ、リビングを出ていった。

イトウ、テーブル上の本を手に取る。

キャリーケースを持った春花、リビングに入ってくる。

春花、イトウを見た。

春花　「死んだら何味になりたい？」

イトウ、春花に気づく。

過去。大学の図書館のカウンター越し。

春花　「先生、何て言ってた？」

イトウ　「やっぱり気晴らしで借りたそうです」

春花　「やっぱり」

イトウ　「あでも、延長できるかって聞かれました」

春花　「え、先生に？意外とハマったのかな」

イトウ　「かもしれませんね」

春花　「イトウくんは？」

イトウ　「はい？」
春花　「感想聞かせてって言ったじゃん。え忘れたの？」
イトウ　「覚えてます覚えてます。えっと」
春花　「（イトウをジッと見ている）」
イトウ　「僕は、何味になりたいっていうより、何味を食べたいのかなって思いました」
春花　「イトウくんが？あ、食べたいほうってこと？」
イトウ　「おかしいですかね、おかしいですね、いや間違いなくおかしい」
春花　「全然。おかしくない。どんな味がいいの？」
イトウ　「いや、味を考えるほど、味じゃないことを考えてしまうというか」
春花　「うん？」
イトウ　「や、何でもないです。そろそろ失礼します」
春花　「延長するんでしょ？その本」
イトウ　「え」
春花　「また聞かせて。どんな味なのか」

イトウ、本を開く。
中から白い紙が出てくる。

イトウ　「春花さん（白い紙を差し出す）」
春花　「（受け取る）わざわざ書いてくれたの？」
イトウ　「すみません。口で言うより伝わるかもと思いまして。ダメですか？」
春花　「イトウくんらしいと思う。でも直接聞きたかった気もするな」
イトウ　「え、じゃあ直接言います。長くなってもいいですか」
春花　「うん、手短に」
イトウ　「はい。え」
春花　「ウソウソ。どうぞ」
イトウ　「……あるページにこう書いてありました。「食べるほどその願いは深まる、だから残さず食べてもらえるような味でいたい」。思うにそれって全部丸ごと誰かに自分を残したいってことじゃないかって。要は「人間なら生きている間に何かを残したいと思う」ってこの本は言ってるわけで、でも僕はあまりそういうこと考えないっていうか、ミスジ先生がよく言ってますけど『食べることは、生き物との絆を強くして感情を豊かにする』『生き物の営みそのものを讃えることが食べることだ』って。すごくわかる気がします。僕は食べられるより、食べたいんです。食べられるより、食べることで繋がりたい」
春花　「……」
イトウ　「長くなりましたすみません」
春花　「私は面白かったよ」
イトウ　「ああ。正直僕には、この本面白いのか何なのかよく」
春花　「違うよ。イトウくんが面白いの」
イトウ　「え、面白い」
春花　「うん面白い。すごく面白い」

イトウ　「すごく面白いですか。そうか。自分がどんな味であってほしいとか僕にはないんです。貴方は何味なのか。どうしてそればかり考えるのか。あれからずっと考えてました。それを話したくて……

春花、イトウが話している間に立ち上がり、その場を離れた。
イトウの視界から春花の姿が消える。

イトウ　「あれ。春花さん、話したいです。春花さん、話したいことがあるんです、春花さん、春花さん……」

イトウ、テーブルの上の箱を見た。
箱から次々に本を取り出していく。
エイゴ、戻ってきた。
イトウに気づき、思わずイトウを止める。

エイゴ　どういうつもり？君何がしたいの？
イトウ　すみません
エイゴ　もう春花に近づくな。役所って狭い職場なの、妻が不倫してましたとかどこから知れたのってくらい噂になるんだから。あ、あと、今回のこと君の会社に連絡するから。イトウって社員は嘘をついて担当になって人の妻と関係持ちました。葬儀で心を痛めている遺族を逆撫でして家をグチャグチャにしてくれました。自分で連絡する？

イトウ　ストーカー
エイゴ　ストーカー？そうね君ストーカーみたいなもんだ、しつこく俺らにつきまとって
イトウ　春花さんはストーカー被害に遭っていました
エイゴ　は？
イトウ　図書館で勤務してた頃。あの紙は、犯人の学生が書いたものです。何十枚、何百枚、春花さんへの想いを綴った内容から、中には狂気じみた脅迫状のようなものまで
エイゴ　おい何の話だ。春花がストーカーに？
イトウ　犯人は……ミスジ先生のゼミの学生でした。僕は先生の研究室で、教職員の間でしか共有されない「学内秘」の資料を見つけました
エイゴ　学内秘

春花が箱の中から本を手に取り開くと、そのたびに、中から白い紙が現れる。

イトウ　「1月某日。図書館の本の中から、図書館に勤務する女性職員宛ての手紙が発見される。内容は、女性職員への好意を示すものに留まらず、次のような内容のものも含まれていた。「貴方を食べたい。貴方に食らいつきその肉を噛んで噛んで噛み砕いて飲み込みたい」。女性職員と、犯人とされる学生に対する詳細な聴取が行われた結果、本件は学生の未熟さと幼稚さが招いた

ものであり、カウンセリングを条件に、通学そのものは制限しないこととし、被害者の女性職員には、身の安全を確保する目的で、犯人の学生だけでなく、全ての学生との接触を極力避けるよう配置換えを行うこととした。この対応は、犯人を問い詰めずに大学全体で生徒を見守るものであり、本女性職員もこれに同意、ストーカー事件として警察へ被害届を提出することは見送られた。」

春花、箱を閉じ、箱を持って去る。

イトウ　春花さんは図書館で姿を見なくなりました。聞けば書庫の整理の係に回ったとのことでした。ミスジ先生が頻繁に図書館の書庫まで本を探しに降りるようになったのはその頃からです

エイゴ　親父が？

春花、戻ってきた。

春花　「この前さ、先生が借りた本の中に給与明細挟んであった」

イトウ　「え？先生、何でそんなこと」

春花　一たぶん栞代わりじゃない？チラシとか、教職員向けの通知とか先生何でも挟んじゃう、でそのまま返却。イトウくん気づかなかった？」

イトウ　「はい、僕、中身は見ないので」

春花　「先生案外適当なの」

エイゴ　おい待ってくれ。何で親父の話になるんだ

イトウ　（本に挟んだ紙を取り出しエイゴに見せる）これは学内秘の資料にあったストーカーの手紙のコピーです。ミスジ先生は、これを栞代わりにしていたんです

春花　「先生、付箋も貼ったまま返すし、毎回剥がすの大変」

イトウ　「すいません僕が剥がして返せばいいんですけど」

春花　「いいの、先生あれわざとだから」

イトウ　「わざと？」

春花　「そういうところがあるの先生は」

イトウ　「ですね、先生は」

エイゴ　親父の話はやめろ。栞代わり？必死に考えた言い訳がそれか？

イトウ　先生は学内では少し浮いた存在で、先生の研究室を頻繁に出入りしていることで僕自身、周囲から色々言われて不快な思いをしたこともあります。でも先生は全く動じない。きっとストーカーの一件も、先生には大したことではなかったんだと思います

春花　「イトウくんはよく先生と一緒にいられるね」

イトウ　先生は僕に生きる指標を与えてくれました

春花　「大好きなのね」

イトウ　好きなのかはわかりません。でも先生は唯一僕のことを

エイゴ　黙れ。君は嘘つきだ。親父に何を教わったって言って

たっけ。ああ真理と本質？君は親父の信者か？もっともらしい言葉で、さもわかったように喋る、さすが教え子だよ。もし君の話が本当なら、ストーカーを生んだのは親父じゃないのか？親父の教え子なんだろ？だったら全部親父のせいだろ

イトウ　ストーカーと先生は関係ありません。どうしてそこまで先生のことを憎むんですか

エイゴ　憎む？

イトウ　遺食を拒むのはどうしてですか。貴方の父親じゃないですか

エイゴ　だから何だ、君には関係ない

春花　関係ないなんて言わないでよ

エイゴ　え？

ある日のリビングの時間が入り混じる。

春花　遺食の話。昨日、法案が国会通ったんだって

エイゴ　そう。ビールあったっけ、冷蔵庫

春花　うん。ね、役所で手続きとかするんでしょ？忙しくなるんじゃない？

エイゴ　担当部署に異動にならなきゃ関係ないよ

春花　そっか、今は子どものために保育所作るのがエイゴの仕事だ

エイゴ　……子ども作る？

春花　モモがいる

エイゴ　だから二人目

春花　要らない

エイゴ　どうして

春花　理由がいる？あ、ビールだっけ（立ち上がる）

エイゴ　要らない

春花　義務じゃないと思うよ

エイゴ　子ども？

春花　遺食。むしろ私は権利だと思う、食べたければ食べる、食べないなら残す。エイゴはどっち？

イトウ　食べたくても食べられない人もいるんです。だから義務です

春花　権利があるってすごいことだよね（と、その場で寝る）

イトウ　先生の研究が世に受け入れられたんです。功績が認められたんです。息子として誇らしいとは思わないんですか？

エイゴ　勝手に生きて好き放題な生活して、ルールを破った、アイツはただの変人だ

イトウ　ルールを破ったって、何の話をしているんですか？

エイゴ　アイツは母さんを食べた

イトウ　え

エイゴ　法律が施行される前にだ

イトウ　……

エイゴ　どうだ？死んだ人の肉を、法律もないのに自分の妻を食べたのが、お前が尊敬するミスジ先生だ

イトウ　それを、見たんですか

エイゴ　いいや見てはない。でも葬式の前の日、親父が俺にだけ聞こえる声で言ったんだ「母さんを食べた」って。聞き間違いかと思った。火葬場で母さんの体を見ながら、どこを食べた？いつ、どうやって？白い布に覆われた母さんの体を想いながら泣きたくても泣けなくなりましたよ、頭が真っ白になって。気づいたら、俺だけに言った話がいつの間にか親戚中に広がってて、皆に距離を置かれるようになりました。法律が施行されて、ちらほら連絡があった親戚もあります。でも一度途切れた信頼はそう簡単に取り戻せるものじゃありません。法律が変わっても、遺食相続が義務化されても、俺の親父への気持ちは変わらない。親父は変人です。その親父を、俺は食べません

春花　（寝言のように）猫背になってるよエイゴ

エイゴ　俺はまっとうに生きてきた。公務員になったし、結婚もしてモモを授かった。一度離婚しましたが、俺はモモを死ぬ気で育ててきました。親父はルールを破って母さんを食べた後も、研究にうつつを抜かして好きな時に好きなだけ海外を飛び回って、一人暮らしを満喫してました。母さんが生きていた頃からずっと自由だった、勝手だった。その母さんを、親父は最期に食べたんです。……相続人だから親父を食え？自分の都合で正義を振りかざしてルールを破る人間が大嫌いです、俺は親父が嫌いです

イトウ、テーブルの上のペットボトルのお茶を飲む。

イトウ、ノドがイガイガし、咳き込む。

イトウ　（イガイガした声で）ごちそうさまでした

イトウ、去った。

エイゴ、うつむいている。

春花　「死んだら何味になりたい
私の舌に残る寛容の味
それは戸惑いの味になり
次にはさみしさに、その次は怒りに
しまいには、ほんの少し永遠に残るような苦味を
甘い顔で許し、苦い苦しみに生きたのだから
けれど本当の最期だけは、優しさの味がいい」

エイゴ、イトウが残したペットボトルを手に取り、去った。

春花、目が覚め、体を起こした。

テーブルの上の本をキャリーケースに入れていく。

モモが入ってきた。

春花　おかえり。あれ、アオキくんとご飯は

モモ　うん、食べた（キャリーケースを見て）どっか行くの

春花　おじいちゃんち。取っておく本を選ぶの、お父さんこだとホコリっぽくなるから嫌なんだって。旅行の準

備してたのそのままにしてたし、本入れるのにちょうどいいかなって

モモ　そうなんだね

春花　お夜食作っといた。モモちゃんの好きな昆布のおにぎり。大学の受験勉強の時、いつも昆布だった

モモ　ありがと。でも食べたから

春花　頭使ったらすぐお腹空くから。今が一番大変なときだもの（行こうとする）

モモ　お母さん

春花　（モモを見た）

モモ　春さん、お母さんだから。だから、えっと……そう、権利を主張していいと思う。権利っていうのは、だから、春さんは、食べたいって思うだろうし

春花　モモちゃん、おじいちゃん食べたい？

モモ　わかんない、お父さん食べないかもだし、でも、？

春花　春さんのことは、食べたい、って思う

モモ

春花、モモをそっと抱きしめた。

春花　モモは優しい。貴方の優しさ、好きよ

モモ　……

春花　行ってきます

春花、モモから離れ、出ていく。

モモ　行ってらっしゃい

モモ、座り、スマホで勉強を始める。

が、集中できずスマホをしまい、テーブルに突っ伏す。

【第六場】その翌日、午前

モモ、テーブルに突っ伏したまま寝ている。

玄関でアオキの声。

アオキ　（声）アオキです。おはようございます

モモ、反応しない。

アオキ　（声）お邪魔します

しばらくして、スーツ姿のアオキ、リビングに現れた。

鮮やかな青の胡蝶蘭の花と、ケーキの箱を持っている。

アオキ　モモちゃん。（近づいて）モーモちゃん

モモ　（体を起こす）

アオキ　おはよう

モモ　何時

アオキ　もう昼前。あれ、昨日と同じ服？お風呂入ってないの？

モモ　（アオキを見て）何故いる

アオキ　いるから。また鍵掛かってなかった、ダメだって不用心は。あ、お花持ってきた。あとケーキ買ってきた。お父さんは？

モモ　いない

アオキ　お母さんは？

モモ　いない

アオキ　モモちゃんは、いる

モモ　……

アオキ　見て。スーツ買った。アロマーニ

モモ　アロマーニ

アオキ　うん、めっちゃ高かった

モモ　それ偽物だよ

アオキ　えウソ！ちゃんとアロマーニっていうお店で買ったんだよ。（裏地のタグを見せる）ほらアロマーニって書いてある

モモ　（花を見て）それ遺食式用？

アオキ　うん。昨日持ってきたやつはちょっと色が薄かった。後から染めてるからどうしてもムラが出るんだよね。綺麗でしょ？

モモ　造花じゃん

アオキ　造花じゃないよ本物

モモ　色塗ってるし、なんか嘘くさ

アオキ　そんな言い方、お花に失礼でしょ

モモ　（花に向かって）どうもすいません（立ち上がり、リビングを出ようとする）

アオキ　どこ行くの？

モモ　（アオキを見る）

アオキ　一緒に行こう

モモ　トイレに？

アオキ　あ、それは、うん、さすがに、でもそれくらいの気持ちで俺は

モモ　おじいちゃんを食べていいのかわかんないし、春さんどっか行っちゃったし、お父さんは帰ってこないしもうすぐ試験なのにいつまで経っても平均点ギリギリだしもお！もおーー！

アオキ　モオー！（牛のマネをする）モオーモちゃんなら絶対受かるよ

モモ　この世に絶対はない！

モモ、リビングを出ていった。

アオキ、一人ポツネン。

ホコリっぽいのか、一回、くしゃみをした。

アオキ、リビングを出て奥へ。

しばらくして、掃除機を持って戻ってきた。

アオキ、掃除機をかける。

エイゴが現れた。

アオキを見て止まる。

アオキ、掃除機を止めた。エイゴに気づいた。

アオキ　お邪魔してます、アオキです。ホコリっぽかったので掃除機を

エイゴ　ああ……

アオキ　あらためまして、モモさんとお付き合いさせていただいてます。どうぞケーキです（箱の入った袋を差し出す）あ、あとこちらも（テーブルの上の花を指す）

エイゴ　（ケーキと花を持たされて）誕生日のお祝いですか？

アオキ　そうなんですかおめでとうございます！

エイゴ　違いますよ違います

アオキ　ああ、お花は遺食式用です。お母様のご希望です

エイゴ　ああ……綺麗ですね

アオキ　僕がですか？

エイゴ　んなわけあるか

アオキ　お母様は？

エイゴ　ああ、仕事かな

アオキ　緊張されてますか？

エイゴ　ん？

アオキ　僕緊張してます。馴れてないもので

エイゴ　まあそれは私もです。娘の彼氏に挨拶されるのは初めてなんで

アオキ　僕が初めてのオトコですか

エイゴ　言い方気になる。お茶淹れましょうか

アオキ　水筒あるんで大丈夫です

エイゴ　君もか

エイゴ、座る。

アオキ　あの、お父さん……！

エイゴ　……はい

アオキ　モモさんが心配してます

エイゴ　ん？

アオキ　お父さんのことが心配で試験勉強はかどってなくて、力になりたいけど何の役にも立てない彼氏ですみません

エイゴ　いいよ。うん？

アオキ　お父さんは保育園を作ったんですよね？（トンカチを振る仕草）

エイゴ　僕が建てたわけじゃない

アオキ　バイト先への通り道にあの保育園があります。通るたびに子どもたちの元気な声が聞こえてきて、こんな場所を作ったお父さんはすごいなって心から尊敬します。バイトの自分が恥ずかしい

エイゴ　就職は？

アオキ　全く考えてません。お花をリサイクルしてます

エイゴ　リサイクル

アオキ　お店でロスになったお花を持ち帰って加工したり、遺食式用のお花もロスフラワーを使ってます。お持ちした胡蝶蘭は生命力の強い花で、咲いて枯れてもまた咲

いて、５０年以上は花を咲かせてくれます。死んで終わりじゃなく、受け継がれてまた生きるんです。父を食べた時も、そういうお花を添えたかったって後悔してます

エイゴ　ああ、お父様

アオキ　好きなものに触れたら素直に好きって言える父でした。僕も好きなものを好きと言いたい、だからモモちゃんを好きと言える人生で良かったです

エイゴ　……

アオキ　すいません、緊張しすぎて何も喋れなくて

エイゴ　十分喋ってますよ。あ、晩御飯、食べていきます？妻の帰り待ちになりますけど

アオキ　いいんですか？

エイゴ　うんまあ、いつ帰ってくるかアレだけど

アオキ　僕作りましょうか？

エイゴ　君が？

アオキ　はい。昔調理師免許を取ろうとして取れなかったので自信あります。何が食べたいですか？

エイゴ　何でもいい

アオキ　おまかせで。わかりました！冷蔵庫の物使わせてもらいますね！（ケーキの箱を持って）あ、これ冷蔵庫入れときますね！

アオキ、リビングを出ていった。

アオキ　（声）冷蔵庫開けまーす！

エイゴ、テーブルの上の胡蝶蘭を見つめる。
モモがリビングに現れた。
エイゴ、モモと目を合わせる。

エイゴ　おお。アオキくん来てるよ。なぜかご飯作るって、今台所。ケーキもらったけど食べる？

モモ　いい

モモ、座り、スマホで勉強をしようと試みる。
エイゴ、モモの勉強を覗き見る。

エイゴ　試験もうすぐだな。順調？

モモ　イエス

エイゴ　問１。遺食相続の手続きに必要なマイナンバー法の正式名称は？

モモ　「行政手続における特定の個人を識別するための番号の利用等に関する法律」。平成２５年法律第２７号

エイゴ　順調

モモ　問２

エイゴ　え、俺が答えるの？いいけど

モモ　離婚するの？

エイゴ　……何で

モモ　女の勘

エイゴ　それ言う人、お父さん嫌い
モモ　答えは
エイゴ　するわけないじゃん
モモ　問3。子ども欲しかった？春さんの
エイゴ　どうした。試験問題出せ
モモ　答え
エイゴ　パス
モモ　……
エイゴ　や、お前がいる
モモ　私がいるから、だから
エイゴ　お前がいる、それ以上何が要る
モモ　……
エイゴ　次、俺の番、問4
モモ　今集中してるから
エイゴ　アオキくんと結婚するんだろ？
モモ　多分ね
エイゴ　お母さんにも報告する？
モモ　お母さん
エイゴ　もう一人の。お前のさ、
モモ　私のお母さんは春さんだよ。ずっと
エイゴ　……これ玄関置こうか

エイゴ、花を持って、リビングを出て玄関へ。
ほどなくして戻ってきた。

エイゴ　勉強の邪魔して悪かったな
モモ　問5
エイゴ　もう終わり
モモ　おじいちゃん。食べないの？
エイゴ　……お前どっち派？
モモ　日本人は、出された食事を美味しくいただく。生まれたときから、生まれてからも、ずっと私たちは食べている。誰かの何かを食べて今生きている。だから残さず最後まで食べて、ありがとうございます。それが大切な人への努力義務
エイゴ　……
モモ　そう書いてるネット記事があった
エイゴ　それ政府のヨイショ記事だよ、どうせ金もらって書いてる
モモ　お父さん
エイゴ　お前はお前の問題だけ解いたらいいよ
モモ　イトウさん来たよ。お父さんがいないときに
エイゴ　（モモを見る）え
モモ　おじいちゃんの肉持ってきたから受け取った。お父さん気持ち固まってないかもって思ったけど受け取った。でも捨てた
エイゴ　は？
モモ　だってただの肉だもん
エイゴ　ホントに捨てたのか？どこに
モモ　どこでもいいじゃん

エイゴ　どこに捨てたのかって聞いてる！
モモ　どこでもいいじゃん食べないんならゴミだよ！おじいちゃんじゃないよ！
エイゴ　親父はゴミじゃない
モモ　ゴミだよ！そうじゃないって言うなら行って拾って煮て焼いて美味しく食べればいいじゃん！食べなよ！食べなよ！食べなよ！

アオキ、声を聞いてリビングにやってきた。

アオキ　モモちゃん！落ち着いて！（エイゴから引き離す）

エイゴ、リビングを出て、玄関へ。

アオキ　お父さん？（玄関に向かって）親子丼でよかったですかー？（モモに）どうしたの
モモ　私全然素直じゃない、嘘つきだ

モモ、うつむく。
アオキ、モモをギュッとする。
玄関のチャイム。何回か鳴る。

アオキ　（大声で）取り込み中でーす！

イトウが入ってきた。

布に包まれた箱を両手で抱えている。

イトウ　お取り込み中すみません。お父様かお母様はいない
アオキ　そうですか
イトウ

イトウ、箱をテーブルに置く。

アオキ　お前モモちゃん狙ってるだろ
イトウ　はい？
アオキ　モモちゃんには指一本触れさせない、もし触れたらお前食ってやるからな！

イトウ、アオキに向かって「食う」ような仕草。
アオキ、ビビッてモモから離れる。

モモ　それ何ですか
イトウ　エイイチ様です

モモ、イトウを見た。

イトウ　春花様から調理前の再会の依頼を受けましたので、お持ちしました
アオキ　え、それ、ホントにモモちゃんのおじい……
モモ　アオキくんお父さん探してきて

アオキ　え
モモ　早く！
アオキ　はい！

アオキ、急いでリビングを出ていった。

モモ　開けてもいいですか

イトウ、ためらいつつも、箱を包んでいる布を解き、モモを促す。
モモ、箱に近づく。

イトウ　お持ちしたのは右手です。真空状態にして保存していますが、お取り扱いは慎重に

モモ、ゆっくり蓋を開ける。
が、中の肉を見て思わず蓋を閉めた。

モモ　……無理です。食べれません
イトウ　いいんですよ選んで
モモ　……
イトウ　努力されたのなら、もう義務ではありません

モモ、再び、ゆっくり蓋を開ける。

モモ　おじいちゃん。……おじいちゃん……おじいちゃん……

モモ、蓋を閉めた。
モモ、イトウに一礼。

モモ　父を、呼んできます

モモ、リビングを出ていく。

【第七場】その少し後

イトウ、箱を閉じる。
キャリーケースを持った春花、リビングに現れた。
春花、イトウに気づいた。
イトウ、春花に一礼。

春花　誰もいない？
イトウ　はい。旦那さんも、娘さんも外に
春花　……鍵閉まってなかった。不用心な家（箱を見た）
イトウ　先生をお持ちしました
春花　（箱に向かって）先生

春花、箱を見つめている。

沈黙。

イトウ　すみません

春花　謝ってばっかだね、イトウくんは

イトウ　旦那さんに話してしまいました、ストーカーのこと。春花さんとのこと問い詰められてつい

春花　大丈夫？殴られたりしなかった？

イトウ　はい、全部は話してないので

春花　そ

イトウ　お茶をいただきました。全部飲みました。ノドがイガイガしました

春花　……

イトウ　わけわかんなくてすみません

春花　わかんないよね。私もわかんないもん

イトウ　……

春花　先生の家で本の整理してたらさ、何で先生、あの紙、栞にしたんだろうとか、あのページに挟んでたのは何でだろうとか、あーあのとき私、何考えてたっけとか、思い返して

イトウ　あのとき。どうして警察に突き出さなかったんですかうん？

春花　ストーカーは立派な犯罪、脅迫です。学生だからは関係ない。何も罪に問われずに普通に卒業して、就職して、社会人になってスーツを着て、先生からたくさんもらったはずなのに何も変わらず、成長もせず、まっとうなフリをして生きてるんです。だから許しちゃダメなんです

春花　イトウくん。警察に言わなかったのは、貴方を許したからじゃないよ

イトウ　……じゃどうして

春花　どうしても、イトウくんがそんなに怖い子だと思えなかったから

イトウ　……

春花　あれを読んだときね、途方もなく行き場がない感情だらけで、成長痛みたいにあちこちが歪んで膨張して抱えきれなくなってるのかなと思った。若気の至りだから

沈黙。

春花　お茶要る？飲めるようになったの？

イトウ　いえ

春花　じゃあ自分用に淹れてくる（行こうとする）

イトウ、春花の前に。

春花、身構える。

イトウ、床に頭をつける。

イトウ　本当にすみません、本当にすみませんでした

春花　……

イトウ　僕のやったことが広まった後、先生に呼び出されました。僕は自分がやっていることがどういうことなのかわかっていなかったと思います。ただ、感想を、本の感想を春花さんに伝えたいと思っていただけなんです。味を、春花さんが知りたいと僕に言ってくれた味を。１０枚じゃ足りない、１００枚、いやもっとって。書いてる間は楽になれました。子どもでした。僕の中のわけのわからない何かが膨み続けてどうしようもなくて。春花さんを好きな学生はほかにもいました。でも僕は、僕だけは他の人とは違うってわかっていました。ずっと誰にも言えなかった。怖くて、春花さんから返事がないことが怖くて、だから吐き出して、吐き出し方を間違えてノドがずっとイガイガしてどうしようもなくて

春花　本気で思ったの？私を食べたいって

イトウ　はい、だけど殺して食べたいと思ったことは一度もありません。生きている貴方を素敵だと思うことと、食べたいと思うことは、僕の中で同じことでした。法律ができて、遺食師になって、社会人になってからも、僕にとって人を好きになるということは、そういうことでした

春花　赤ちゃんを食べちゃいたいぐらい可愛いって言うね

沈黙。

春花　あー、こういうときなんて言ったらいいのかな。私はイトウくんを一人の学生として見てました。あのとき、もし手紙とか感想文なんて言い訳をしないで私に直接伝えてくれてたら、貴方が抱えてるものに、ちゃんと向き合えたかもしれない。わかんないけどね。けど、「貴方のことを食べたい」なんて、簡単に言えないよね。しんどいね、しんどい

春花、箱を見る。

春花　でも私は、貴方とのことがあったから、先生と書庫でたくさん話せたのかもしれない。わざと貼られた付箋を一枚一枚剥がしながら、少ない言葉数で、言葉以上の時間をね

イトウ　……

春花　いい人いるんだよね？イトウくん最初に話してくれた

イトウ　あれは嘘です。僕は人を好きになることも幸せにすることも、

春花　しっかりしようか。スーツ似合ってるよ

イトウ、動かない。

春花　食べてみる？

イトウ、顔を上げる。

春花、イトウに腕を差し出す。

イトウ　　え。え？

春花　　先生いなくなって寂しい。寂しいんだ

イトウ、おそるおそる、春花の腕を取り、口を近づける。

逡巡しながら、春花の腕を噛んだ。

春花　　痛っ……

イトウ　　あすいません……

春花とイトウ、互いを見た。

イトウ、春花の腕を取ったまま、テーブルに春花を寝かせる。

春花、抵抗しない。

不意に、春花の体が箱に当たった。

イトウ、箱を押しのけ、春花に噛みつこうとする。

春花、箱を見た。

イトウは春花を食べることができない。

イトウ、春花の体を起こしながら立ち上がり、箱を元の場所に戻した。

エイゴがリビングに入ってきた。

エイゴ　　いらっしゃったんですか

イトウ　　お邪魔しています。……あの、遺食式なんですが、上田がまいります。実は婚約相手との結婚式の打ち合わせが急に入ってしまいまして

エイゴ　　ああ、そういう人いたんですか

イトウ　　はい、大変失礼かとは存じますが

エイゴ　　まあどっちでもいいです、肉はもうないんで

イトウ　　はい？

エイゴ　　父はカラスの餌になりました

春花　　何言ってるの？お義父さん、ここにいるよ

エイゴ、促されて、箱を見る。

エイゴ　　え、でもさっき、え、これ親父ですか？

イトウ　　最後にミスジ先生にお会いできてよかったです。それでは

イトウ、出ていく。

春花、イトウを見送りに出ていく。

春花　　（声）元気でね

イトウ　　（声）ありがとうございました

春花　　（声）彼女さんとうまくいきますように

エイゴ、箱をじっと見る。

春花、戻ってきた。

春花　　どう、実物見て

エイゴ　え、これ本当に親父？
春花　開けてみたら？
エイゴ　や、いい（足を押さえる）
春花　何カラスの餌って
エイゴ　あ、うん、ねえモモは？
春花　わからない、そのうち戻ってくるわ
エイゴ　（足を押さえて悶絶）
春花　どうしたの？
エイゴ　久しぶりに走ったら足攣った……あ。さっき帰りながら、モモに君との再婚を初めて話したときのこと思い出してた
春花　そう。モモちゃん、私のことは食べたいって言ってくれたのよ。もう一生覚えておこう

エイゴ、悶絶しながら続ける。

エイゴ　……あ、ストーカーのこと。イトウくんから聞いたよそう
春花　同じゼミの学生が犯人だったってね
エイゴ　？イトウくんがそう言ったの？
春花　君がそいつを守ってやったのに異動になったのは君だったって。勘違いしてごめん。言ってくれたらよかったのに
エイゴ　エイゴにおかしな勘違いされたくなかった。エイゴと出会う前の話だもの
エイゴ　俺に気を遣ってくれたわけだ。君は優しいね
春花　優しくなんかない。犯人の子を警察に言わなかったことで、学内でいろいろ言われた。何か後ろめたいことがあるからじゃないか、私が学生を誘惑したんじゃないか。私はただ大袈裟にしたくなかっただけなのに図書館から異動になったし希望を出しても生徒に近づく部署には戻してもらえないし何なのって。時間が経つほどに犯人に言ってやりたくなった。私はアンタを許したわけじゃない、何卒業してんのよ、何成長してんのよ、子どもでしたとか言い訳するんじゃないよバーカ。……これが私の優しさの正体
エイゴ　……
春花　ね、先生？教職員は大変ですよねー
エイゴ　親父とも、そんな話してたの？
春花　7割方は研究の話よ
エイゴ　あとの3割は？
春花　貴方の話
エイゴ　え、俺の？何話してたの
春花　ホントに聞く気ある？エイゴお義父さんの話になるといつも面倒な顔するから、私も骨折れるのごめん。で、どんな話してたの
エイゴ　直接聞いたら？
春花　え？
エイゴ　目の前にいるんだから。

エイゴ、箱を見る。

エイゴ　（箱に向かって）親父、春花とどんな話してたの。俺のこと話してたって

やや間。

春花　貴方が公務員になったのが誇らしいって

エイゴ　え？

春花　離婚して、一人娘のために必死に仕事して、馴れない育児もして、必死に生きてる貴方の姿がとても愛おしいって

エイゴ　思ってないでしょ

春花　思ってる。エイゴはすごいな、偉いなって

エイゴ　……ほかには？

春花　貴方の牛乳アレルギー、自然放牧の牛乳を提案したのはお義父さんって

エイゴ　ウソ、母さんじゃないの？

春花　お義父さん、医学部の教授にエイゴのアレルギーを直す方法はないか聞いたんだって

エイゴ　そうだったの……ほかには？

春花　タバコやめた理由は、貴方のことを考えてのことだって

エイゴ　俺の？どういうこと？

春花　自分が死んで、エイゴが自分を食べようと思っても、食べられない体じゃ申し訳ないからって

エイゴ　法律もない時からそんなこと考えてたの？

春花　そんなことまで先生は見越してたのかな

エイゴ　……何で母さん食べたの。何でくれなかったの

春花　……

エイゴ　俺許せなかった、ずっと

春花　ごめん。ってお義父さん言ってたよ

エイゴ　……

春花　独り占めしてごめん、それぐらい、母さんのことが大好きだった、って

エイゴ　……え、親父君に話したの？

春花　うん

エイゴ　どういう流れで

春花　多分、子どもは作らないことにしました、ごめんなさいってお義父さんに話したときかな

エイゴ　わざわざ親父に話しに行ったの？

春花　そりゃ一応報告するよ。結婚したら子どもを作るって、なんか当たり前な空気あるじゃない

エイゴ　俺聞いてないよ

春花　言ったらエイゴ怒るでしょ？そのときね、お義父さん言ってくれたの。「子どもがいてもいなくても春花さんは家族だからね」って。どう思われるのか不安だったんだ。どんな民族も、種の繁栄を目的にしてる部分あるでしょ。私が子どもを作らないって言ったら何て言うかなって。でもさすがミスジ教授だわ。「そうか」

ってケロっとしてた。で、「じゃあ俺の秘密を話してあげよう」って話してくれたの。「お義母さんを、大好きだったから食べたんだよ」って

エイゴ　……それ聞いてどう思ったの

春花　そりゃびっくりしたよ。でも、先生ならあり得るって思った

エイゴ　変人だからな

春花　エイゴは、お義父さんが変人だから食べるのが嫌ってこと？

エイゴ　いや親父が一人で食べたのが許せなかったの。俺にもくれよって

春花　最初からそう言えばいいのに

エイゴ　やだよ、だって変人の親父の息子の上にマザコンって思われるじゃん

春花　え、そんな理由？男の子はみんなマザコンだよ？

エイゴ　……遺食って何なんだよ。葬式と何が違うのかな。

春花　（箱に向かって）親父、お前は何味がいいんだよ。

（春花に）ホントに洋食でいいのかな？

（少し笑いながら）モモは中華って言ってなかった？

相談したら？

エイゴ　うん

春花　でも貴方が決めていいのよ

エイゴ　……うん

春花、立ち上がり、リビングを出ようとする。

エイゴ　どこ行くの

春花　洗濯物を取り込むの

エイゴ　別れたくない

春花　……

エイゴ　なんで別れないといけないのかわからない。わからなくて、ごめん。……タタタ！（足が攣った）

春花　散歩じゃなくてジョギングにしたら？

玄関でアオキの声。

アオキ　（声）アオキです！ごめんください！お邪魔します！

アオキが勢いよくリビングに入ってくる。

アオキ　あ、いらっしゃったんですか。失礼しました、鍵が開いてまして

春花　不用心でごめんなさいね。モモは一緒じゃないの？

アオキ　や、それが。（エイゴを見る）お父さん、モモちゃんを迎えに行ってあげてください

エイゴ　はい？

アオキ　お父さん探して走り回って、足が攣って動けなくなっちゃって。なのでお父さん、おんぶに行ってあげてください

エイゴ　ああ。モモはどこに？

アオキ　お父さんが建てた保育園の前です。お父さん来るまでそこにいろって言ってます

エイゴ　わかりました、ありがとうございます

アオキ　（エイゴの手を握る）モモさんは素直で素敵な人です。僕が一生守ります。不束な息子ですがどうか！

エイゴ　うんうん、手離して

春花　ついでにタバコも吸っておいで

エイゴ　いや、もうやめたよ

春花　え？

エイゴ　（自分の体を見て）アイツが食べられない体にはしたくない。（アオキに）行きましょう

エイゴ、リビングを出ていく。

アオキ　じゃあ失礼します

春花　あ、玄関のお花ありがとう。すごく綺麗

アオキ　ご希望どおりの色がなかなか届かなくてすみませんでした。間に合ってよかったです

春花　うん。でも遺食式のお花。エイゴにちゃんと選ばせるから、どんな花があるかまた教えてあげてね

アオキ　わかりました

アオキ、リビングを出ていく。

春花　（アオキに向かって）ありがとう

一人残った春花。ふと、テーブルの上の箱を見た。

春花、リビングを出て玄関へ。

遠くでカラスの鳴き声。

春花、色鮮やかな青い胡蝶蘭の鉢植えを持って戻ってきた。

先に、エイゴが渡されたものである。

春花、胡蝶蘭の花を、エイイチの肉の入った箱の横に置く。

春花、座り、箱を眺める。

春花　さようなら、エイイチ

再びアオキが急ぎ足で現れた。

春花、アオキに気づいた。

アオキ　あ、すいません、何も言わず入ってしまって

春花　ううん。どうしたの？

アオキ　先ほどエイゴ様にこれ（テーブルの花）をお渡ししたんですが、手違いで

春花　手違い？

アオキ　はい。実は一週間ぐらい前に、別の店員がメモを渡されて、お誕生日のお祝いにこの日に届けるように言われてたみたいで。僕てっきり遺食式用と思い込んでたもので

春花　誕生日？あの、これ誰から？

アオキ　（メモを見る）あーミスジ様としか書いてないですね

春花　ミスジ……モモちゃん？エイゴかな

アオキ　（花をよく見る）あ、（花に挿してあるカードを指差す）メッセージカード付いてますよ

春花　あ、これ？（カードを手に取り、開く）

アオキ　サプライズってやつですかね？とにかくおめでとうございました

アオキ、礼をしてリビングを出た。

春花　どうもありがとう

春花、テーブルの上の箱を見た。

春花　誕生日間違ってる。さすがに適当すぎませんか？

春花、箱を両手で掴み、強く抱きしめる。
不意に、箱の蓋を開けた。
カラスが激しく鳴く。
春花、箱の中の、エイイチの肉をジッと見る。
強烈な吐き気を催し、椅子にもたれかかる。
春花、再び箱に近づき、箱の中に手を入れる。
その手には、エイイチの手が握られている。
春花、エイイチの指を口に近づけた。

（おわり）